

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 22 日現在

機関番号：32644

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2010～2014

課題番号：22710255

研究課題名(和文) 英語圏アフリカ地域におけるアフリカ正教会の活動とその発展

研究課題名(英文) The Activities and Expansion of African Orthodox Church in Anglophone Africa

研究代表者

荒木 圭子 (Araki, Keiko)

東海大学・教養学部・准教授

研究者番号：00512633

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：アフリカ正教会がアメリカ合衆国から南アフリカ共和国へ活動を拡大していく過程について明らかにすべく、まず同教会のアメリカでの設立の背景や信条について、当時のアメリカ社会を取り巻いていた人種状況のなかで分析した。さらに南アフリカでの同教会の展開については、とくに南アフリカで同教会を設立したダニエル・ウィリアム・アレグザンダーに焦点を当てて、彼自身のアメリカとの接触(書簡のやり取りや実際の訪米など)を中心に調査した。

研究成果の概要(英文)：In order to explore the process of the African Orthodox Church's expansion from the United States to South Africa, I firstly investigated the organization and the belief of the church, and the racial circumstances surrounding the church and its people in the United States. And then, I focused on Daniel William Alexander to find out how the church was established in South Africa, by examining his direct contact with the United States; correspondence with Americans and his actual visit to the United States.

研究分野：アフリカン・ディアスポラ研究

キーワード：アフリカン・ディアスポラ アフリカ 歴史

1. 研究開始当初の背景

(1) 従来の地域研究は、主に国家やその集合体といった、土地に根ざした区分に基づいて行われてきた。しかし、多くの民族・人種集団は、国境や地域の枠組みを超えて存在し、一つの大きな共同体を築いてきた。

(2) ポール・ギルロイ『ブラック・アトランティック-近代性と二重意識』(月曜社、2006年;原著は1993年発行)で提示されたのは、このような人の関係性に基づいた「地域」の存在である。しかしながら、この「地域」を具体的に実証する研究は未だ十分とはいえない。

(3) とくに、アフリカ内部の動態をディアスポラとの関連で検証しているものを見つけるのは困難である。実はギルロイの『ブラック・アトランティック』にしても、「アフリカ」について語られているにも関わらず、実体的なアフリカが不在であるという決定的な欠陥をもっている。

(4) アフリカとアフリカン・ディアスポラを結びつける研究の多くは、アフリカン・ディアスポラの視点からなされてきたが、ここではアフリカを「起源」や「故郷」といったように静的にとらえてしまう傾向にある。アフリカ内部を動的にとらえる研究が必要とされている。

2. 研究の目的

(1) 本研究の全体的な構想は、アフリカとアフリカン・ディアスポラの世界を、一つの「地域」としてとらえ、そこにおける人、モノ、情報、思想などの有機的な結びつきを歴史的に検証することにある。

(2) 本研究ではとくにアフリカ正教会の活動とアフリカへの波及について検証する。同教会は、1921年、黒人独立教会としてアメリカ合衆国で設立されたのち、南アフリカに活動を拡大した。その後、さらにケニアやウガンダなどにも波及し、のちに同地域における反植民地運動や独立運動の拠点にもなっていた。

(3) この一連の動きのなかには、運動の「連鎖」だけでなく、教会の「現地化」にもなる「断絶」も見られる。一方、このようなアフリカ人の運動は、1960年代アメリカ合衆国の公民権運動にも影響を与えた。ここから見えてくるのは、アフリカ人とアフリカン・ディアスポラが時空を超えて相互に共鳴・影響しあい、単なる単線的な関係ではない複合的な関係を築き上げていたことである。本研究では、アフリカ正教会の活動から見られるアフリカ人とアフリカン・ディアスポラの複合的な関係について明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

本研究は歴史研究である。対象時期は1920年代から1960年代までで、文献研究、資料収集、資料精読の順で進めていく。主たる資

料はエモリー大学に所蔵されている「アフリカ正教会文書(African Orthodox Church Archives)」であるが、ほかに米国公文書、南アフリカ公文書、「マーカス・ガーヴィーおよび万国黒人地位改善協会文書(The Marcus Garvey and Universal Negro Improvement Association Papers)」などを利用する。

また、ケニアとウガンダについても現地での資料収集を行う予定である。教会が現存している場合には、現地を訪れ、教会関係者へのインタビューも行う予定である。

4. 研究成果

(1) アフリカ正教会を通して大西洋地域で超国家的な「黒人世界」が形成されたことを明らかにし、学術大会および論文で発表した。そこで示された内容の概要は以下の通りである。

アフリカ正教会の成立とその信条

アフリカ正教会設立者のジョージ・アレグザンダー・マクガイアは、当時アメリカほか大西洋地域において黒人たちの支持を得ていたガーヴィー運動のなかで指導者的地位を占めていた。

ガーヴィー運動はアメリカやヨーロッパに居住する黒人の地位とアフリカの植民地化とを有機的に結びつけるパン・アフリカニズムの思想を背景とするものである。アフリカ外に居住する黒人の解放にはアフリカの独立が不可欠だとするこの思想のもとで、ガーヴィー運動は黒人種の全体的な解放をめざしていた。

マクガイアはガーヴィー運動の組織のなかで司祭長を務め、影響力を高めていった。マクガイアはガーヴィーと同様、アフリカを射程に入れた黒人の全体的な解放を目指しており、連帯した黒人が統一した黒人教会を有することを理想として、「万国アフリカ教会」と呼ばれる統一教会を設立することを目指した。

マクガイアのいう「万国アフリカ教会」は、既存の特定教派に属するものではなく、メソヂスト、バプティスト、監督派、聖公会、カトリックのほか、イスラム教をも包括し、各教派は運営や信仰において独自性を保つとされた。マクガイアにとって、黒人独自の教会設立には、黒人たちが集団として自己決定権をもち実質的な「力」を握るという意味があった。よって、教派の違いを乗り越えて、教会組織の管理・運営を黒人が団結して行うということが理想とされたのである。

マクガイアのいう教会による黒人解放には「黒人のイエス」や「黒人のマリア」を想定した黒人の自尊心の回復が含まれていた。この黒人解放の論理は、ガーヴィー運動を通してカリブ海やアフリカ地域の黒人たちにも伝えられた。教会における黒人の独立を目指していた各地の黒人たちはこれに共鳴し、

同教会の拡大を担うこととなった。

「万国アフリカ教会」はガーヴィー運動内部の反対で組織化されず、代わりにマクガイアは組織を離れた上で、アフリカ正教会を設立した。同教会は、既存のキリスト教会で疎外感を抱いていた、主に西インド諸島出身の黒人たちの受け皿になった。かれらは母国にいる家族や親戚に同教会の機関誌『ニグロ・チャーチマン』を送付し、同地域における教会の拡大に貢献した。

アフリカ正教会の南アフリカへの波及

アフリカ正教会は、ガーヴィーの『アフリカ帰還』運動の対象であり、当時独立を保っていたリベリアへの布教を想定していた。ガーヴィーの『アフリカ帰還』運動同様、この布教の背景には、西洋の知識や技術を身につけた「進んだ黒人」がアフリカの未開地に住む「遅れた黒人」の発展を牽引すべき、という考えがみられた。

アフリカ正教会のアフリカへの拡大は、実際にはリベリアではなく南アフリカにおいてなされた。南アフリカにおいては、すでにガーヴィー運動を通して、アメリカ的な「黒人」意識（カラードをも「黒人」とする）が受容されつつあった。カラードであったダニエル・ウィリアム・アレグザンダーもその一人であり、ガーヴィー運動の機関紙『ニグロ・ワールド』で同教会の存在を知ったことから同教会の南アフリカでの設立を目指すこととなった。

南アフリカには「白人」を頂点とする階層社会が形成されており、底辺には「原住民」と呼ばれる黒人が位置づけられていた。「白人」が政治や経済などにおける特権を独占し、「原住民」があらゆる権利を剥奪される一方、混血層である「カラード」は中間的存在で、「原住民」より優遇される立場であった。

アレグザンダーはガーヴィーの影響を受け、当時のアメリカ合衆国にみられた「黒人の血が一滴でも入っていれば黒人」という人種区分を受け入れた。それによってカラードとアフリカ人を「黒人」として同一化し、さらにはアメリカに居住する「黒人」とも自己同一化した。その上でアレグザンダーは、ガーヴィーやマクガイアの唱える黒人のあらゆる分野における自立発展を支持したのであった。

南アフリカからの教会設立要請を受けとったマクガイアは、すぐさまアレグザンダーを代理教区長として承認し、南アフリカでの布教を認めた。しかしながら、南アフリカの教会の経済状態などに対するアメリカの聖職者たちの懸念から、以後は慎重な姿勢が取られるようになり、保護観察期間が設けられるようになった。

アレグザンダーの訪米と聖職叙任

アレグザンダーは保護観察期間の終了した1927年に訪米し、ボストンで開催された

第7回アフリカ正教会総会において、ついに大主教の位階を叙任された。これにより、アフリカ正教会は、マクガイアを大主教とするアメリカ大主教区とアレグザンダーを大主教とするアフリカ大主教区のふたつの大主教区をもつ組織となった。

アメリカと南アフリカの大主教区は平等な位置づけとされたが、各大主教区を統括する総主教にはマクガイアが就任し、南アフリカにおいて新たに主教を叙任する際には、アメリカに居住する総主教（あるいは総主教が不在の場合にはアメリカ大主教区の首座主教）の了解を得ることが合意された。しかしながら南アフリカの教区教会会議は完全なる自治組織で、アメリカの憲章および規範と矛盾しない限りにおいて独自の憲章および規範をもつことができ、南アフリカ正教会内部の管轄事項に関しては、アメリカの教会は干渉しないこととした

アフリカ正教会の拡大に関しては、聖職叙任という教会特有の儀式のため、人と人との直接的な接触が織り込まれていた点が、その特徴として認められる。聖職叙任のために訪米していたアレグザンダーと実際に接するなかで、当初はアフリカ人に対するステレオタイプを持っていたアメリカの黒人は、南アフリカのアレグザンダーを「同じ人間」、「同じ人種差別と戦う同胞」として認識するようになった。ここにおいてひとつの「黒人世界」の成立を見ることができるといえる。

(2) 南アフリカからイギリス経由でアメリカへ訪問したアレグザンダーの旅行記から、アレグザンダーによるパン・アフリカニズムの実践と「ブラック・アトランティック」世界の形成に関する研究ノートを発表した。

これにより、アレグザンダーの「黒人」としての自己認識の様子が部分的に明らかにできた。しかし、未分析の旅行記や手記がまだ残っていることと、アレグザンダーがカラードであったことの分析が十分にできていないことから、今後さらに研究を進めていく必要がある。

(3) アレグザンダーがアメリカ合衆国から帰国したのちの南アフリカにおけるアフリカ正教会の発展については、資料の多くが手書きであることから、その分析に時間がかかり、まだ完了していない。また、ウガンダやケニアへの波及については、東アフリカでの現地調査ができなかったこともあり、ごく一部しか解明することができなかった。これらの部分は、アフリカにおける動態の解明という点で重要である。引きつづき、研究テーマとして取り組んでいきたい。

また、カラードであるアレグザンダーが、従来「黒人」による超国家運動として捉えられてきたパン・アフリカニズムの実体化とそれによる「ブラック・アトランティック」の形成・発展を引き受けていたことは注目に値

する。「ブラック・アトランティック」における主体の再検討を促すものだからである。これにより、一枚岩でない「ブラック・アトランティック」像を抽出することが可能と考えられるが、今回の調査ではそこまで踏み込んだ検討ができなかった。今後の研究課題としたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3 件)

荒木圭子、ある南アフリカ人カラードのアメリカ旅行-ダニエル・ウイリアム・アレグザンダーの旅行記から-、東海大学紀要 教養学部、査読無、第 45 輯、2014、307-311

荒木圭子、アフリカ正教会とその南アフリカへの波及-環大西洋地域における「黒人世界」の展開-、東海大学紀要 教養学部、査読有、第 43 輯、2012、123-141

荒木圭子、アフリカ正教会とパン・アフリカニズム、アフリカ、査読無、2012 年秋号、2012、34-39

〔学会発表〕(計 3 件)

荒木圭子、南アフリカにおけるアフリカ正教会、日本アフリカ学会 第 48 回学術大会、2011 年 5 月 22 日、弘前大学(青森県弘前市)

荒木圭子、アフリカ正教会の設立とその南アフリカへの波及、「アフリカ系アメリカ人コミュニティ形成史」研究会第 8 回会合、2011 年 4 月 17 日、専修大学(東京都千代田区)

荒木圭子、アフリカ正教会の成立と南アフリカへの波及、「アフリカ系アメリカ人コミュニティ形成史」研究会第 5 回会合、2010 年 4 月 18 日、専修大学(東京都千代田区)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

荒木 圭子 (ARAKI KEIKO)

東海大学・教養学部・准教授

研究者番号：00512633